

基調

講演

「ベルリンの壁崩壊の後で—ドイツ現代史研究の視点から」

これまで長い間、ドイツ現代史への眼差しは1989年のベルリンの壁崩壊に向けられてきた。だがそれから30年が経過した今、壁崩壊以降の時代も歴史家の視野に入ってきた。本講演では、ここ30年にわたりドイツのあり方を特徴づけた最も重要な出来事とその展開を取り上げよう。それらはまずドイツ統一が及ぼした経済的・社会的・文化的影響、難民と難民申請者の流入であり、次に欧州連合の展開とドイツ外交の新たな展開と軍事介入の問題、さらに社会的変容と社会保障政策の転換といった問題である。講演の最後には、現在のドイツが直面する問題の所在と、それが歴史的文脈においていかに評価されるべきかを問うてみたい。

ウルリヒ・ヘルベルト Prof. Dr. Ulrich Herbert



1951年生まれ。歴史学、ドイツ学、民俗学を修めた後、エッセン大学、ハーゲン通信教育大学、テル・アヴィヴ大学、ナチ史研究所所長を経て、1995年から2019年までフライブルク大学近現代史講座教授。2019年から2020年にはロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (London School of Economics and Political Science) およびロンドン・ドイツ歴史研究所客員教授。1999年にはGottfried Wilhelm Leibniz-Preisを受賞。

主要著作：

Fremdarbeiter. Politik und Praxis des "Ausländer-Einsatzes" in der Kriegswirtschaft des Dritten Reiches [外国人労働者: 第三帝国の戦時経済における『外国人の動員』をめぐる政治と実践], Berlin/Bonn 1985.

Best. Biographische Studien über Radikalismus, Weltanschauung und Vernunft, 1903-1989

[(ヴェルナー・) ベスト: ラディカリズム、世界観、理性に関する伝記的研究 1903-1989], Bonn 1996.

Geschichte der Ausländerpolitik in Deutschland. Saisonarbeiter, Zwangsarbeiter, Gastarbeiter, Flüchtlinge [ドイツにおける外国人政策史: 季節労働者、強制労働者、ガストアルバイター、難民], München 2001.

Geschichte Deutschlands im 20. Jahrhundert [20世紀ドイツ史], München 2014.

パネリスト

福永美和子

大東文化大学外国語学部専任講師。東京大学大学院博士課程単位取得満期退学。共編著に『現代ドイツへの視座—歴史学的アプローチ 第1巻: 想起の文化とグローバル市民社会』(勉誠出版)、訳書にイアン・カーショー『ヒトラー 下・天罰 1936-1945』(白水社)等。

平松英人

ドイツ・ヨーロッパ研究センター助教。独ハレ大学で博士号(歴史学)取得。著書に『Bürger im Spiegelbild der Armut: Armenwesen und Armenfürsorge in den Städten Köln und Ösaka im Vergleich』(iudicium)等。

石田勇治

東京大学大学院教授。独マールブルク大学で博士号取得。著書に『過去の克服—ヒトラー後のドイツ』(白水社)、『ヒトラーとナチ・ドイツ』(講談社現代新書)ほか多数。2008年には「法と民主主義特別賞」を受賞。

司会

川喜田敦子

中央大学文学部教授。東京大学大学院で博士号取得。著書に『東欧からのドイツ人の「追放」—20世紀の住民移動の歴史のなかで—』(白水社)、『ドイツの歴史教育』(白水社)。訳書にイアン・カーショー『ヒトラー 上・傲慢 1989-1936』(白水社)等。